

1. 家庭学習が必要なわけ

学校だけでは、すべての学習内容を定着させることはむずかしい。
・学習した内容は、その時わかっていても、忘れてしまう。
学校での学習が楽しくなり、新たなやる気も生まれる。
学習する習慣は、その後の学校や、実社会に出ても役立つ。



2. 家庭学習についての基本的なことから

(1) 継続は力なり

1つの習慣が身につくためには、1ヶ月かかるといわれています。つまり、家庭学習の習慣化のためには、1ヶ月は決まったパターンでやり続けさせることが大切になります。

家庭学習は、宿題からスタートします。

宿題のあとは決めた内容を、決めたパターンで学習します。

何をしたらいいかわからない人は、学校の時間割にあわせて今日学校で学習したところを開いて、教科書を読んだり、漢字をもう一度書いてみたり、計算したりするなどしてみましょう。

「1日で半分以上忘れる」という記憶についての研究結果があります。忘れないようにする方法は、できるだけ早めに復習することです。特に、基礎的な学習(読み・書き・計算など)は、繰り返しの中で定着します。まさに、「継続は力なり」です。

高学年になるにつれ、次第に予習(教科書を読む、ノートを視写する、意味調べをするなど)も入れていきます。

(2) 目標達成した喜びを～達成できる目標からスタート

家庭学習の目標(時間と内容)は、子どもと相談しながら決めることが大切です。その際、「達成できる目標」を決めましょう。時間的にも内容的にも、ちょっぴり背伸びした目標がいいでしょう。(例：1週間毎日30分学習する。漢字を毎日1ページ書いて漢字ノートを終わらせるなど...、子どもに応じた目標を決めます。)

目標が達成したときは、子どもとともに喜びましょう。



家族でほほえみ合う関係は、最も必要な時代になっています。

「ほほえみは最大の教育力を発揮する」とは、有名な言葉です。

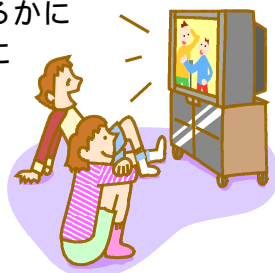
そして、成功体験は、セルフ・エスティーム(自己肯定感)を高めるために大切です。できたことが自信につながり、新たなやる気がわいてきます。

特に、苦手な教科については自信をなくしていますので、できるところからスタートし、やればできるという気持ちを積み重ねていって、自信を回復させましょう。その際、「あせらず、ゆっくり」ととりくむことが大切になります。

(3)「ルールづくり」を

子どもと話し合っ「いつ、どこで、どんなふうに」学習するかについてのルールを決めましょう。できるだけ毎日、同じ時間帯に決まった場所で学習する方がいいと思います。

学習時間については、下の表のように「10～20分×学年」といわれていますが、子どもの状況に合わせて決めましょう。もちろん、ダラダラ1時間より、集中30分の方が効果的ですから、時間ばかりに目くじらを立てても意味がありません。



学習の時間は「10～20分×学年」

学年	学習時間のめやす
1年生	10分～20分
2年生	20分～40分
3年生	30分～1時間
4年生	40分～1時間20分
5年生	50分～1時間40分
6年生	1時間～2時間

きょうだいと同じ場所で学習する時は、「途中で学習以外の話はできるだけしない」「早く終わってもじゃまをしない」などのルールもつくりましょう。

また、子どもが学習している場では、テレビを消すことは大切なルールの1つです。

(4)忘れ物と整理整頓

宿題が終わったら、その場でカバンの中に入れさせます。あとで入れようとする、忘れ物をするきっかけになってしまいます。

朝、バタバタと時間割をする子は、忘れ物が多いようです。時間割は、前日のうちに済ませておきましょう。(忘れ物が多い子は、二度点検するのもいい方法です。)

また、整理整頓の習慣が、忘れ物を減らし、家庭学習の効率を高めます。鉛筆・赤ペン・消しゴム・のり・セロテープ・コンパス・定規・分度器など、学年や学習に応じた筆記用具をきちんと用意しておきます。なお、鉛筆は必ず削っておきましょう。

次に、教科書やノート、ドリルや辞典などはすぐに取り出せるように整理整頓しておきます。その他に、計算紙やメモ用紙などが机の周りがあると便利です。

時間割は、二度点検をする。

整理整頓の習慣が、忘れ物を減らし、学習の効率を高める。

コラム

学習を支える基本的な生活習慣～睡眠、食事、テレビ～

記憶力を高めるためには、十分な睡眠をとることが必要です。特にレム睡眠は、起きている間に記憶された脳の中の情報を整理し、思い出しやすくする働きがあるそうです。

また、脳に必要なエネルギーは、筋力や他のものと違って蓄えができませんので、毎回の食事によって支えられています。ですから、たとえば、朝食抜きで登校させると午前中の間、脳はあまり働かない状態にあります。

なお、米国の調査で、教育番組は学習能力を発達させるのに対して、娯楽番組や一般向け番組(特に暴力的な番組)は学習能力を発達させないという研究報告が数々あります。

さあ、睡眠、食事、テレビ(ゲーム)など基本的な生活習慣を見直しましょう。

3. 家庭生活の中から学習を考える

(1) 国語の学習

話す

あなたの家庭の会話は、どのタイプ？

単語会話タイプ

- ・「はやく！」
- ・「急いで！」
- ・「ごはん！」「風呂！」「くつ！」「お金！」...

単文会話タイプ

- ・「はやく起きなさい！」
- ・「くつをならべて！」
- ・「かばんはこんな所においちゃ、ダメ！」

複文会話タイプ（つなぎ言葉が入った文）

- ・「そろそろ起きるんだよ。そうしないと、学校に遅れるよ。」
- ・「さあ、かばんをかたづけようか。そして、一緒にテレビをみよう。」
- ・「今は晴れているけど、午後から雨がふるそうだよ。」



「単語会話」では、言語能力、文章能力が伸びない。

急がせることは、やる気を高めない。

命令では、人は育たない。

*「家庭での豊かな会話」と「学力」は相関関係がある！

聞く

聞き役になって、子どもの話を聞きましょう。

力の差がある場合(親と子ども、教師と子ども、上司と部下など)、対話しようと思ってもそれは実際はなかなか成立しにくいものです。だからこそ、教えたり、説教したりしたくなる誘惑に勝ちながら、聞き役になることが大切になります。

「人は感情を受け止めてもらいたいために話をする」と言われています。つまり、自分の話を聞いてくれる相手がいること、共感してくれる相手がいることが大切であり、それはセルフ・エスティーム(自己肯定感)を高めることになります。

聞き方「あいうえお」
あ...あいてを見て
い...いっしょうけんめい
う...うなづきなから
え...えがおで
お...おわりまで

子どもの話には「ながら聞き」をせずに、顔を見てうなづきながら、最後まで真剣に聞きたいものです。内容によっては、いつも「えがおで」聞くことはできませんが、「楽しかったね」「悲しかったね」「すごいね」「よかったね」などの共感的な応答が子どもの情緒を安定させ、子どもの基本的信頼感を根付かせることになります。

読む

声を出して読む練習(音読^{おんどく})を大切にしましょう。
音読はできるだけ毎日しましょう。(国語の教科書に限らずに)

「、」で1拍休み。「。」「」で2拍休み。段落の区切り目(行があいているところ)で3拍休み。このぐらいの調子で進むようにする。

できるだけ、はっきりとした発音(口型)で読むようにする。

聞く力を育てる。

できるなら、だれかが最初にお手本として読んで、子どもはその文字や文を目で追いながら聞くようにします。読むためには、まずはしっかり聞けることが大事だからです。 **してみせて いっしょにして 一人でさせる**

「**連れ読み**」をする。(連れそって読む)

大人が区切って読んで、子どもがそのあとに同じところを繰り返して読みます。たとえば、下記のようにします。最初は、一語一語ずつ進みます。

親：「ながい」

子：「ながい」

親：「しっぽです。」

子：「しっぽです。」

*高学年でも大切です。特に学力が思うようについていない子は、「読む力」が弱いようです。そんな時は、「連れ読み」から出発します。続けることでみるみる伸びていきます。

しだいに、長くしていきます。一文(「。」「」)がついているところまで、そして、形式段落(行頭が一字下がっているところ)までへと...

耳で覚えて読む子もいますが、そんな時はできるだけ文字を見ながら、一語一語確認しながら読ませます。目、耳、口の3つを同時に働かせます。

「**一斉読み**」をする。

いっしょに声をそろえて読むことです。最初はゆっくり読みます。

「**交互読み**」をする。

一文(一段落)ずつ親子で交互^{こうご}に読んでいきます。

「**一人読み**」をする。

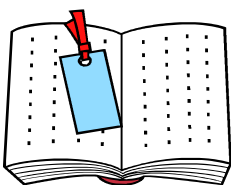
「**表現読み**」をする。(気持ちをこめて読みましょう。)



読み聞かせ

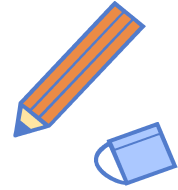
読み聞かせで大切なことは、子どもが本を楽しみ、想像したり感動したりすることにあります。また、本を仲立ちに子どもに接する時間を作ることにより、親子の基本的信頼感が生まれ、情緒的に安定し、よりやる気のある子に育っていきます。

時には、読んでほしいと頼んでおきながら、実際に読み始めると聞いていないように思えたり、すぐに眠ってしまったりすることがあるかもしれません。それは、子どもが自分のために読んでくれているという満足感や安心感を味わっている行為だからです。ですから、「読んで聞いてないじゃないの!」と言うのではなく、子どものささやかな願いに答えてあげてください。



書く

教科書、文字の書き写し(視写^{ししゃ})をさせましょう。



視写には、次のような効果が考えられます。

書き方のきまり(句読点、「」)、会話文、段落分けなど)、ひらがなとカタカナの使い分け、漢字や送り仮名、言葉や助詞の使い方に自然に気づき、身につく。書くことに慣れる。根気よく書き続けることで、書く習慣がつく。

目で見て、声に出して読んで、耳で聞いて、手で書くという4つのプロセスを通して、文章の内容をつかむことができるようになる。

また、高学年になるに従い視写とともにノートまとめをすることも進めましょう。

文章(日記、手紙、メモなど)を書く習慣をつけさせましょう。

文章を書くことの意義は、生活を二度体験することができることです。一度目は体験そのもの、二度目はその体験を心の中で思い出しながら再体験することです。

文章を書くことは、次のような効果や利点が考えられます。

繰り返し読み直すことができ、相手に正確に伝えることもできる。
ものごとをしっかりと見て、しっかりとらえることができるようになる。
自分の生活や考え方を見直し、自分自身を客観的に見る力が育つようになる。

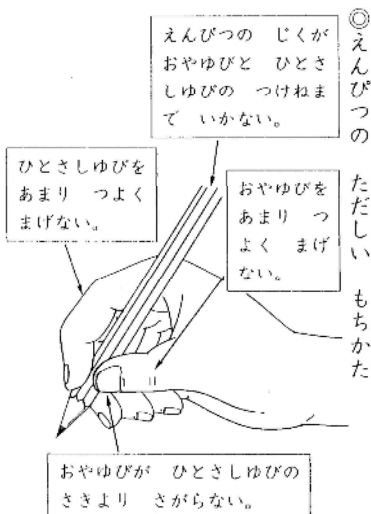
なお、文章を考えて書くことは、なかなかスムーズにはいきません。ですから、書くことが見つからないという作文(日記)には、対話をしつつ書くことを発見させてみたり、具体的なテーマや様子を与えてみたりするといいでしょう。

鉛筆は正しく持ちましょう。

文字は、低学年であればあるほど、芯のやわらかい鉛筆(たとえば2Bぐらい)で、ゆっくり大きく書かせましょう。低学年のように指の力がついていないときに、芯がかたくてうすい鉛筆を使い続けると、力を入れるためおかしい握りグセがつくことがあります。

鉛筆の持ち方は、持ち始めた時期に、または低学年のはやい時期をのがさず正しく教えることです。クセがついていたら、できるだけ直させる方がいいと思います。「はやく、きれいに、正確に」書くには、正しい持ち方が合理的だからです。

正しい持ち方を左図に示します。「かきかた」指導書より



(2)算数・数学の学習

計算は、具体的なものを使ってしましょう。

算数の学習は、具体的なものを使って数えたり、数の大小を調べたり、順序を理解させたりすることが大切です。たとえば、風呂で100まで数えられる幼児でも、具体的な数量を数えることはできないことが多いものです。(これを「ふる場算数」という)

具体的には、「たして10になる数」を練習するときなど、両手におはじきをにぎり、片手を開き、もう片方の手はいくつとか、数を言わせるのも一つの方法でしょう。

また、「たして10になる数」は、「なんでも10」と名づけて、答え合うのも楽しいものです。その後、「なんでも100」「なんでも1000」...「なんでも17」などと、変化をつければ、おもしろさやスリルも出てきます。

「なんでも10」は、次のようにします。

親：「なんでも10をするよ。」「3」
子：「7！」
親：「10」
子：「0！」

整数だけではなく、「なんでも1」として、「0.3」と言って、「0.7」と答えさせたり、「“ ”」と言って、「” ”」と答えさせたり、小数や分数の世界にも応用ができます。

親と子が反対になって、子どもに出題させてみるのもいいでしょう。

文章題に慣れましょう。

「計算はできるのに、どうも文章題はニガテで・・・」と思っている子どもは多いようです。生活力や国語力との関係もあります。

まず、文章題では、「たずねていること」「わかっていること」を読みとらせます。つまり、文章の意味をつかむことです。苦手な子にとっては、このところをゆっくりしていねいにおこないます。そうすれば、考え方を導くことができます。

つぎに、式を立て、計算し、答えをかく...と続くわけですが。文意はつかめても式を立てられなければ、図をかきましょう(かかせてみましょう)。簡単に答えを教えずに、できるだけ考える手段を見つけさせてほしいのです。

なお、大きな数や分数、小数が出てくる文章題につまずいているときは、かんたんな整数になおして考えさせるのもいい方法です。

自分で文章題を作らせましょう。

文章題がよくできるかどうかは、自分で文章題が作れるかどうかでわかります。

子どもから出題させ、親が解いてみるのもいいコミュニケーションになるでしょう。

算数の苦手な子どもに向かって、決して、「これもわからんのか！」などと怒ったり、イヤミを言ったりしないでください。子どもの本心は、わかりたいと思っています。

「怒ってビシビシしごいて算数を得意にさせる」という学説は、いまだありません。特に算数の学力は、本人の自信と深い関係がある言われています。

